

道について



蘭越町 法誓寺住職

黒萩 昌

自己とは何ぞや、 これ人生の根本問題なり

「自己とは何ぞや、これ人生の根本問題なり」。これは明治の清沢満之師の言葉です。「自己を明らかにする」ということは仏教の究極の眼目です。そして自己が明らかになった時、そこに「生死出すべき道」が自然（じねん）に開かれて来ます。そのために真宗は、先ず自らに目覚めること、自覚を私たちに求めてきます。

しかし、私たちにとって自分の全てを客観的に明らかにすることは不可能なことです。どうしてもそこに私たち自身の主観、都合が入り込みます。ですから、自分を知っているつもりでいても、それは自分の都合で見た私であり、自分のごく一部を誤解して見ているに過ぎないのです。

結局、私たちが自己を明らかにするためには、何かに教えてもらうしかありません。仏教では「自分を知らないまま生きていく」私たちの在り様を無明と言います。そしてその無明の闇を破って「自

分を明らかにしてくれる」仏智のはたらきをひかり、光明にたとえます。『唯信鈔文意』に「光明は智慧のかたちなりとするべし」とあるのはそのことを言っています。光明の根拠は仏智なのです。

「いのち」について

私たちは、生まれてから、死とともに消滅していくようなごく限られた範囲の中で「自分」を探し出そうとします。しかしそこにあるのは、表面に現れたごく一部の自分でしかありません。真宗では「いのち」を、無始曠劫以来（むしこうごういらい）から尽未来際（じんみらいさい）にいたる無限の時間で考えます。始まりがあつて終わりがあつたような、有限相対の世界で「いのち」をとらえようとしても本当のことは決してわかりません。無始曠劫以来からの「いのち」を見なければ、私たちの深い罪業の説明がつきません。また、尽未来際にいたるまでの「いのち」を考えなければ、人生に決着がつきません。

人間存在の深い闇

「去る十一月二日の夕方、波の音が静かに響く大磯港（神奈川県大磯町）の岸壁に、七十九歳の車椅子の妻と、その妻を約四十年介護してきた八十一歳の夫の姿があつた。散歩に行こう。『奥さん思い』と近所で評判だった夫はこう言つて妻を車で連れ出した。だが夫は岸壁から車椅子ごと妻を海に突き落とし、妻は溺死した。『仲が良かった』（知人）という夫婦に何があつたのか（毎日新聞）。妻の照子さんは、三十九年前に脳の病気を患い、それ以来、夫である藤原宏容疑者は照子さんを献身的に介護していたという。夫婦をよく知る男性は「奥さんのデイサービス

の往復時に階段にスロープを取り付けて上り下りの介助をしたり、あまり外に出ない奥さんのためにベランダに植物を並べたりしていた」と語っていたという。ここに道徳・倫理、善悪では説明のつかない人間の深い闇があります。宿業の身としか説明のしようのない人間の事実はあります。無始曠劫以来、「いのち」は生まれては死に生まれては死に、姿かたちを変えて流転を繰り返し限りなく「我執」を蓄積して今日の私が在るのです。実はこの「我執」こそが私なのです。

四無量心について

元来、私たちは仏から四つの無量心を

願われている存在です。四つの無量心とは慈無量心（他に樂を与える）、悲無量心（他の苦を除く）、喜無量心（他の樂を喜ぶ）、捨無量心（他に対して平等である）です。私たちには、どこかでこの仏の願いに応えていこうとする心がはたらいています。

前段の藤原被告は、「介護に疲れた」、「妻の体が不自由になりふびんに思った」、「施設に入所させるのはかわいそうだと思つた」などの供述をしていると言います。ここに我執と四無量心の間を揺れ動く藤原被告の苦悩があつたのだと思います。そして最後の最後に、我執が四無量心に勝（まさ）つたということなのでしょう。

世界、虚空が皆ほとけ

「ええな 世界、虚空が皆ほとけ わしもそのなか なむあみだぶつ」。妙好人、浅原才市の詩です。私たちが目にするものの耳にするものの一切に、仏智の光明がはたらいているということなのです。

私たちはテレビ・新聞を通して、藤原宏被告と妻の照子さん夫婦に起こつた老々介護の悲しい事件を目にし耳にしました。その時私たちは、仏の光明に照らされて私自身の深い罪業性、宿業の身を仏から教えられていたのです。

池田勇諦先生が講義の中で、三十年来先生の御自坊の同朋講座で聴聞しておられた一人の男性から、亡くなられる三日

前に「人間に生まれさせてもらつて良かった。仏法に遇わしてもらつて良かった。ありがとう。さいなら。」という電話をもつたという話を紹介しておられました。長い間の仏法聴聞とお念仏の生活を通して宿業の身を自覚していかれたのだと思います。

宿業の身の自覚は深い悲しみでありますが、それは同時に頭の上げようのない世界、絶対他力の世界に出させていたたく時でもあります。

自覚道という仏道

私たちの歩む仏道は、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫（こうこう）より已来（このかた）、常に没し常に流転して、出離（しゅつり）の縁あることなき身」をどこまでも教えられ続けていく道です。しかし私たちは「出離の縁あることなき身」を教えられてうなずいても、すぐにそのことを忘れてしまいます。その私たちに「まだまだ聞かせてもらわなければ、まだまだうなずかせてもらわなければ」と、私たちが求道の一年生に呼び戻し、どこまでも求道心を純化していつてくれるのが本願の摂取不捨のはたらきです。弓づくり職人の楠見蔵吉さんは、「今が絶対ではない」と職人道を歩み続けておられます。私たちが歩む自覚道という仏道もまた、「もうわかつた」と決して腰をおろすことなく、最後の一息まで歩み続ける一筋の道です。（完）

門徒新年会のご案内

初顔合わせを兼ねました門徒新年会を開催いたします。ご参加の方はお電話・FAXにて、「ご住所・お名前」をご連絡願います。

■日 時 令和五年一月二十二日（日）

午前十一時三十分より

■場 所 大谷ホール

■会 費 一、五〇〇円

（当日受付にてお預かりします）

■申し込み〆切 令和五年一月十五日（日）

新年に皆様とお寺でお会いできることを職員一同楽しみにしております。

※コロナ感染状況によっては中止の場合があります。

書道教室「日本習字 旭別支部」のご案内

月に二回、お寺で書道教室を開催しております。現在は先生が不在の「同好会」として会員九名で活動しており、お互いに教え合いながら書道の上達に励んでいます。ご興味のある方は、お気軽に別院事務所（担当 柳澤・水上）までご連絡ください（見学もしていただけます）。ご一緒に書道を楽しみましょう。

■日 時 月二回（練習日はその都度連絡）

十五時～十七時

■場 所 旭川別院本館1階広間

■会 費 一回三〇〇円

※「日本習字」への入会金二、〇〇〇円（一年目のみ）＋お手本代二、二〇〇円（毎年）を納めていただいております。



春季彼岸会

令和五年 三月二十日（月）～二十二日（水）

「亡き人からいただいた尊いご縁に出あう大切な行事」

旭川別院では、春と秋のお中日（春分の日、秋分の日）に彼岸会法要をおつとめします。彼岸とは、覚りの世界「浄土」という意味です。亡き人を偲ぶ事を通して、亡き人と出遇いなおし、そして自分自身の帰すべきところを定めよと呼びかけておられます。皆様におかれましては、この機会を大切にしていただきますよう念じまして、是非ともお参り下さいますようご案内申し上げます。

講 時 午後1時
師 間 寺林 正裕 師

初心の集い

身近な仏事等と
輪番連続講話 一年間・八回

本年度も四月より列座と輪番のお話を中心に開講します。

日 時 毎月十三日

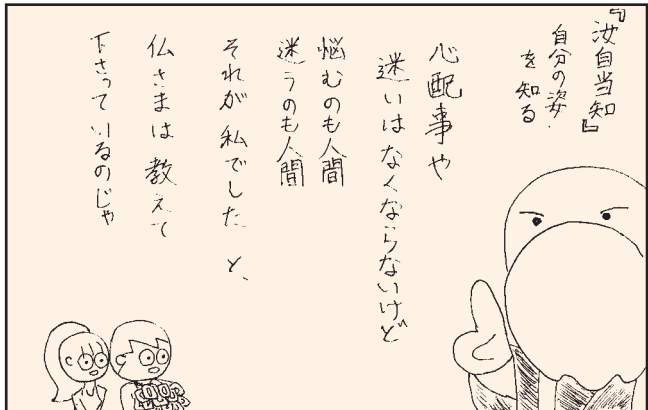
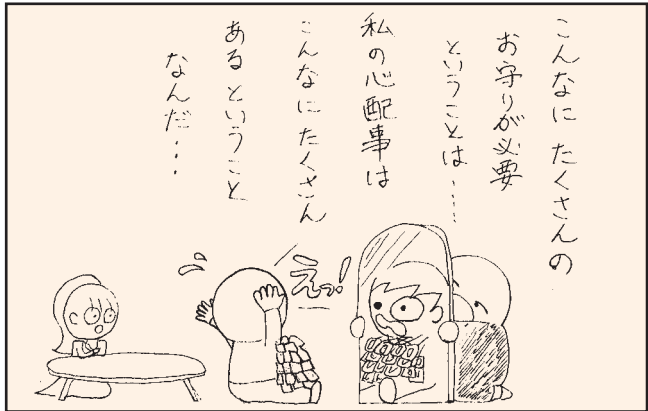
四月・五月・七月・九月・

十月・十二月・二月・三月

午後一時～三時

内 容 お勤め・身近な仏事等（列座・輪番のお話）

*会員・会費制ではありませんので、なたでも参加できます。



別院子ども会

令和4年10月22日(土)、秋の子ども会を開催しました。今回は「子どもの国探検ツアー」と題して、「北海道子どもの国」(砂川市)へ行きました。久しぶりの開催となりましたが、前回に続いて参加してくれた子ども達もおり、みんなで楽しくアスレチックやフワフワドーム(写真)で遊びました。子ども達の笑顔で遊ぶ姿に、スタッフ一同元気をもらいました。今年もみんなで楽しめる子ども会を企画していきますので、お子様のご参加をお待ちしております。

※子ども会のご案内をご希望の方は、別院事務所(担当 川村・水上)までご連絡願います。

仏法これあれ

道内御法話巡り

北海道教区第11組清雲寺 住職 垣原 智章

世の中の出来事が目まぐるしく変化している中で「平穩に暮らしたい」というのが私の思いであります。しかし、気がつけば不安になってしまいうる来事に囲まれていることが多くあります。家族のことや地域のこと、お寺のことなど大小様々であります。そんな日々を過ごしている私に「大丈夫だよ」と言ってくれた方が二人います。

一人は、お寺に戻った頃に参加した集会で、だんだんと寂しくなっていく町について話していたとき「この町は大丈夫だよ。この町を支えてくれる若者がいるからね。」と私に力強く言ってくれました。もう一人は、いよいよ私が住職になるといふとき、務めていけるだろうかと不安を打ち明けると「うちのお寺は大丈夫だよ。みんな助けてくれるよ。」と言ってくれました。

この二人の「大丈夫だよ」という言葉が、とても力強く感じ、心が温かくなるような気がしたのです。決して不安がなくなったということではありません。

お経の中には「大丈夫」や「丈夫」という言葉が出てきます。仏様の徳やほたらきを表す異名として示されています。それは、私たちに届けられている願いだと思ふのです。

しかし「大丈夫か?」と声をかけられて、その声に私はどう答えることが出来るでしょうか。

「心配ないよ」と言われても、心には「本当に?」という答えしかありません。疑いの心しかありません。そんな私に向けられた、二人の「大丈夫」という言葉には「一人じゃない」というこ

公開学習会のご案内

昨年に引き続き四月から真宗寺・島山明光先生にご出向いただき、公開学習会を開講します。どなたでも是非この機会にご参加下さい。

期 日	講 場	所 師	費 用
令和五年度(年九回、一月、八月、十一月はお休みです) 毎月一日・午後七時より 八時三十分頃まで	旭川別院二階広間	島山明光師 (真宗大谷派真宗寺前住職)	五〇〇円

親鸞誕生会

昨年四月の親鸞誕生会にはコロナ禍での開催となりましたが、吹奏楽部の演奏や舞楽、ビゴ大会など多くの催しを行い、三日間で延べ五〇〇人以上の御来院をいただき盛大にとりおこなわれました。本年も春頃に開催予定です。

コロナの影響でお寺はもとより、人と人が繋がりが出会う機会が少なくなるなかにおいて、皆様方にとつて少しでも元の活気ある生活の場をお寺として開いていけたらと願っております。日程が決まり次第ご通知させていただきます。

報恩講報告 令和四年十一月一〜五日

三年ぶりとなる宣心院殿のご参修、また大勢の御法中・雅楽会「帯広和暢会」のご参勤、御門徒のご参詣をいただき、報恩講を厳修いたしました。ご講師の黒萩昌先生、義盛幸規先生には遠方よりご出講いただき、ご門徒の皆様と共に法話を聴聞させていただきました。昨今の状況によりお斎は中止となりましたが(お弁当・お赤飯・お餅をお持ち帰り)、また皆様とご一緒にお斎がいただけることを願っております。御参詣いただきましてありがとうございます。

合掌

幼稚園型認定こども園 旭川別院附属 大谷さくら幼稚園

旭川別院附属大谷さくら幼稚園便り

2学期は、暑い夏から深まる秋へ、そして冬への季節の移り変わりを、毎日の遊びの中で感じました。まだまだ感染症とのにらめっこは続きますが、負けずに元気に過ごす身体作りをしていきたいと思っています。

クラスの様子

*0歳児 ひよこ組

毎日の大谷の杜で遊び、季節の移り変わりを全身で感じています！

*1歳児 りす組

天気の良い日は外気浴。お部屋では色々な素材、おもちゃに触れて遊びます。



ガラスについた氷を不思議そうに見ています

*2歳児 うさぎ組

絵の具、粘土、クレヨンなど様々な感触・表現遊びを経験しました。



雪が積もりました。早速雪山滑りを楽しみます！

*3歳児 こあら組

お花の色水遊びから、色に興味を持った子ども達。透明のスライムに水性ペンで色をつけ、変化を観察しています。



*4歳児 ばんだ組

ばんだ組の色水遊びは、水性ペンで色水作り、ジュース屋さんごっこと続いています。



食育

◆実りの秋を感じる

うさぎ・ばんだ組の育てたじゃがいもが大豊作！うさぎ組はふかし芋にして、ばんだ組は収穫したきゅうりを使い、ポテトサラダを作って、美味しくいただきました。



どんぐりやまつぼっくり等の木の実が豊かに実りました。フライパンで炒めて、お料理ごっこが盛り上がります。



5歳児 きりん組の活動

★わくわく冒険旅行
行き先、企画を子ども達で話し合って決めました。



『キトウシ森林公園』お城に到着！



展望台からの景色 遠くまで良く見えます！



お昼ご飯はバーベキューです！



おやつは自分達で育てたポップコーン。部屋中が美味しそうな香りです。

★青雲小学校校庭散歩



登り棒に靴下を脱いで挑戦！学校も遊ぶ場所があって、行くのが楽しみにになりました。

★初雪



冷たいね！！！！

ご門徒の声

門徒

池田 由恵

私には幼少期から不安と心配がいつもありました。それは家庭環境によるものか分かりません。十代後半から、なぜここに生まれさせられたのかと思うようになり、何から逃れるようにして結婚しましたが、実家のことはついてきました。嫁ぎ先の確執や夫が丈夫ではなかった上に、生まれた娘達には生活全般にアレルギーが強く、食べられる物はほんの少しの米、雑穀、野菜、塩のみ、一日一日、命をつなぐような生活でした。救われた！と、天理教、エホバ、キリスト教、生長の家等、求めました。先生方のおっしゃられることはわかるのですが、それが私には実行できないのです。努力もできない者は、いったいどうしたら救われるのか、悶々とした日々が続きました。平成九年、年末ラジオ深夜便人生読本、林曉宇、この人なら…と思いついた日訪ねました。私の話を聞き終え「あんたはそのままでもいい、ナムアミダブツに会うために生まれてきたんだなあ。」とおっしゃいました。驚きと同時に、それなら私にもできるかも…と浅はかでしたが思いました。

先生は若い頃、結核で肺を一部切除しており、奥様も同じくその手術のため肋骨が数本なく身体は傾き、二人とも病弱で子供はなく、持家もなく、乞食同然の生活もしてきたようでした。これらのことが私には貴く感じられました。先生から頂いたものは、母親的なあたたかいものでした。先生が亡くなられてからの私の歩みは只、「先生と会った」というだけの札をブラブラさせて生活してきたように思えます。「あんたの病は重いなあ、みんな遊んでるんだぞ。こんな所へは来んぞ。病の重い人は色々医者を探すがなあ。」とおっしゃった先生の言葉。私は今、貴いお念仏の方々に遭わせて頂き、その言葉にやっと少し頷かされているところです。

うどんダ

雪道の運転は何年経っても慣れないものです。冬期は特に気を付けて走行しているつもりですが、可能ならなるべく運転は控えたいと毎年思っています。

生活道路では降雪で車一台がやっと通れる位の道路幅しかなくて、対向車とはお互いに譲り合って走らないといけない状況も珍しくありません。そんな中、歩道が無く仕方なしに雪で狭くなった車道を歩いている歩行者の方を見ると、「危ないなあ、こっちは急いでいるのだから歩行者はもっと端を歩いてよ」と思うことがあります。又雪道の中、自転車をつらつらと乗っている人を見ると、「時期を考えなさいよ、同じ車道を走るんじゃないよ」と相手を非難する感情も起こります。

しかし逆に自分が道路を歩く時は前後から車両が来ると、「危ないなあ、こっちは歩行者なんだから近くを通るなよ」とか「もつとゆっくり気を使って走って欲しい」という感情が起きます。つまり、自分の置かれる立場によって真逆の感情が湧いてくるのです。自分が車を運転している時は歩行者を邪魔に思っている、自分が道路を歩く時は車を邪魔に思うのです。親鸞聖人は「凡夫というは無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところをおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと教えられます。煩惱みれの凡夫は誰のことでもなく、この私のことだと気づかれます。あつちにフラフラこつちにフラフラと、身勝手にその日暮らしをしている自分の姿を教わることです。

小宮山 一貴

真宗大谷派 旭川別院

歴史ある本来の姿での儀式

葬儀への提案

旭川別院を会場とした葬儀が執り行えるよう準備を致しました。亡き故人とお別れを告げるだけの告別式ではなく、故人との繋がりを大切に、仏教本来の儀式に基づいたご葬儀です。どうぞご利用下さい。



大谷ホールは、大きな会場設備も豊富に備わっております。小規模でなくとも野卓でお葬式をされた方は是非ご利用ください。



使用料 (葬儀・会場費込)

●各広間 …………… 100,000円 (税込)
●大谷ホール …… 150,000円 (税込)

※詳細は別院迄 TEL 0166-22-2409